

不易と流行

校長 鈴木 恵 一

耳を澄ますと校舎内外の生活音が聞こえてきます。授業中の先生の声、黒板とチョークが当たる音、教科書やノートをめくる微かな音、ワイワイガヤガヤとグループワークで真剣に話し合っている声、キーボードのタッチ音。放課後には、校長室の窓際を軽やかに駆け抜ける陸上部の足音、野球部やソフトボール部、テニス部の打球音、サッカー部のかけ声、体育館からは各部の檄を飛ばす声、校長室の真上の四階から降り注ぐ吹奏楽部の演奏音。私が青年教師だった頃と寸分違わぬ啓北の原風景を今も音で感じ、「ああ、今日もみんな頑張っているなあ」とイメージを膨らませています。

私たちは視覚から多くの情報を得ると同時に、言葉を音として聴き、意味ある概念に変換し、またある時は、生活の中にある様々な音からイメージを膨らませ、物事の判断や理解、行動へとつなげています。自然の中に身を置けば、風にそよぐ木々の音、雨音、川のせせらぎ、波の音を感じます。太古の昔、人類は五感（視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚）をフル稼働して感性を磨き、時には危険を察知し進化してきました。

八〇年代、携帯型音楽プレイヤーが登場して間もなく、ヘッドフォンをつけて独自の世界に浸る「自己領域化」現象に警鐘が鳴らされました。音楽を楽しむこと自体は、芸術や情操教育の観点から奨励されるべきなのですが、公共の場に私的な事柄を持ち込み、それが唯一絶対の「私だけの世界」として振る舞うことで様々な問題を生み出しているという指摘がありました。この議論はその後、九〇年代に登場した携帯電話によって一層加速しました。携帯電話・スマホの操作と閲覧もまた自己領域の形成を助長し、身近な事象への注意・関心を遮断しています。いわゆる「ながらスマホ」による事故、「他者の話ほうわの空」という弊害を生んでいます。

外界情報（生活音、他者からの語りかけ、周囲の様子）を遮断し自己の領域に没入する機会が一層増大しています。SNS活用の増大によって家庭での直接会話が減っているそうです。家族は人間形成の場であり、直接対面によって本音で話し合いながらコミュニケーション能力を鍛える原点です。この小さな集団において意思の疎通が上手くいかないと、学校や会社、地域など、より大きな社会集団でのコミュニケーションも難しくなります。相手の息づかいを肌で感じられないコミュニケーションには大きな落とし穴があります。

コミュニケーションの欠如は、理解力を低下させ、他者との間に誤解をもたらし、ひいては日本社会や国際社会に大きな損失をもたらします。スマホもSNSもそれ自体が悪いわけではありません。誰かと繋がることも悪くはありません。

賢明なあなたなら察しがつくことでしょう。「不易」とは、時代を超えて変わらない価値あるもの。「流行」とは、時代の変化とともに変えていく必要があるもの。あなたと私の共通の課題として、これからも考えていきましょう。